

2025 年度 職員の研修報告②

夏休み期間を利用して様々な研修を受け学びを深めてきました。提出された研修報告の一部をご紹介します。

★幼保小 夏の教育連携研修大会 7 月 25 日(金)

第 4 分科会 言葉部会

○学んだこと・新たに知ったこと

- ・ 「イメージの共有が言葉を豊かにする」 幼・保・小の発表に共通する言葉であった。例えば、保育園5歳児の事例では、クラス全員での話し合いだと発言する子としない子が出てきてしまうので、1 度まずやってみよう! となった。その後やってみてどうだったかを話し合うと、いろいろな子が話すようになったり、聞くようになったりした、という話があった。多様な経験が言葉の領域を豊かにしていくことを知った

○保育へどう活かしていくか

- ・ こども園の 4 歳児の事例において、生き物との関りを通して育っていったという話があった。生き物を見て子どもがつぶやいたことを書き出し可視化したところ、いろいろな子が言葉で伝え合う姿が出てきたということを知り、クラスでもやってみようと思った。子どもたちの豊かな言葉の表現が可視化することで共有されていくのだと思った。
- ・ 心を揺れ動かす経験や絵本などで想像の世界を味わうことで、経験が言葉となり、言葉が文字になっていく、という話から、引き続き保育の中で様々な絵本や出来事に出会えるようにしていきたいと思う。

第 4 分科会 健康部会

○学んだこと・新たに知ったこと

- ・ 幼稚園の年中の実践報告の中で「がんばりまんチャレンジ」というものがあった。様々なあそび(鉄棒・縄跳び・泥団子作りなど)が書かれたカードをそれぞれ配り、できたらシールを貼るという取り組みをやっていて印象に残った。
- ・ 小学校の実践報告では、「安心」「夢中」というキーワードを大事にされていた。「安心」という面では、子どもたちの今までの運動経験をj知るためにアンケートを取り、やったことがあるという安心感を持てるようにしていた。「夢中」という面では、とにかく楽しくできるよう身近な世界観(動物・水族館)の中から様々な体の動きを取りいれできるようにしているということを知ることができた。

○保育へどう活かしていくか

- ・ 今回の研修を受けて、幼保小での運動あそびのつながりを学ぶことができた。小学校の体育が 1,2 年生は「体づくり運動」という名目だったところから、今は「運動あそび」という名前に変わり、子ども自身が選択したり、子どもにゆだねたりという場面が増えたという。また、自分のやりたい気持ちを大事にし、授業を作るという話を聞き、園でもなるべく様々な体の動きを経験し、小学校にあがった時に「やってみたい」という気持ちが生まれるように、今できることを考えていきたい。
- ・ 実践報告の中で、自由あそびだとあそびが偏ってしまうため、「がんばりまんチャレンジ」を取り入れているというものがあった。すべてやるのではなく、提示することで様々なあそび、動きを知る、触れるきっかけになるのではと思った。一方で、やりたくない子へのアプローチやクラス内での差のうめ方が難しいと思った。

○学んだこと・新たに知ったこと

- ・ アタッチメントとは、子どもが怖くて不安なとき、感情が崩れたときに特定の大人にくっついて「もう大丈夫だ」という安心感に浸ること。単なるスキンシップや愛情とは異なる。
- ・ 縦断研究・・・特定の人を時間軸に沿ってずっと追いかけて調べていくもの。
〈剥奪研究〉物理的な環境は整っていてもアタッチメントが足りないため、発達の遅れやゆがみがある。
心身に長期的なダメージ、特に自己(自己信頼)と社会性(他者依頼)の発達に深い傷が生じる。
〈介入研究〉ある研究では乳幼児期の保育が40歳50歳の経済状況・幸福を分けるとのこと。家族外の安定した大人との関係が「非認知」=「自己と社会性」の発達を保障できる。
- ・ 子どもは「安心感の輪」を回っている。
安定型:「安心の輪」を安定して回る。(あたたかい受容的養育)
回避型:怖くて不安でも親にあまりくっつかない。(やや拒絶的養育で子どもはくっつきすぎると逃げられた経験から)
アンビバレント型:後追いやしがみつが多い。(やや気まぐれな養育で不安を感じやすい)
無秩序・無方向型:よくわからないどっちつかずの行動をとる。(不適切な養育と強い関係)

○保育へどう活かしていくか

- ・ アタッチメントは1人の感情の崩れを2人の関係によってたて直すことと聞き、とても納得した。信頼している人にいつでも保護してもらえることへの確かな見通しがあることで、自発的に探索(冒険や挑戦)ができることなので、保育者として常に子どもに安心感を持ってもらえる存在でありたい。
- ・ 大人の役割は「安全な避難所」であり「安心の基地」であること。子どもの崩れた感情を共感的に受け止め、気持ちを立て直し安心感を回復させた後、また背中を押して一人で歩いていけるよう応援していくことも大切にしたい。
- ・ 集団生活である保育の現場では、必ずしも1対1の関わりがよいというわけではない。子どもは、集団全体の活動に目配りができる保育者に安心感を持ち、信頼するようになるので、そのことも意識していきたい。

○学んだこと・新たに知ったこと

- ・ ことばの発達は、わかるのが先で言えるようになるのは後ということだった。(わかることばのうち言えるのは1割程度)
- ・ 人と物との関係は自分と他者又は自分と物の「二項関係」をしっかり結び、共同注意が成立する9~10ヶ月を目安に自分と他者と物の「三項関係」が結べるようになる。
- ・ 子どもの視線の先にあるものに大人が注目し、その時のことばがけがことばを育てる。子どものタイミングに合わせ、子どもの注意が向いている時に添えたことばが出来事とことばのつながりを学ぶきっかけとなる。

○保育へどう活かしていくか

- ・ ことばは身近な大人との豊かなコミュニケーションによって育まれるので、子どもたちと接する時のことば遣いや動作、表情などにより一層気を配っていききたい。
- ・ ことばのおくれた気になるお子さんには着目点(聞こえ・状況理解・ことば理解・対人コミュニケーション等)に留意し、ゆっくりだけれど育っている(いずれ追いつく)のか、何かしらの問題(聞こえ・発達しにくい状態・環境・発達に関すること)があるのかを慎重に見極めていききたい。

★ほいく is

「子ども主体のトイレトレーニングの進め方」

講師; 定金 雅子

○学んだこと・新たに知ったこと

- ・ 排尿・排便のメカニズムを学ぶことができた。「トイレに行く」という行為でも①尿意・便意に気付く ②今やっている遊びを中断する ③他に気になる刺激を抑制する ④トイレに行くことを自己決断する ⑤トイレまで排尿・便意を我慢する といういくつかの工程があるのだと改めて気づいた。トイレを切り離して考えがちだが、生活の一部であり、無理なく進められる発達段階かどうかを生活の中で確かめる必要があるということ、またその方法を学んだ。
- ・ 排尿は前頭葉(前頭前野)で判断される→この育ちを配慮してトレーニングを行う。トイトレは生活の一部であり、切り離して考えない。
内肛門括約筋は自律神経によって無意識にコントロールされている。副交感神経を優位にできるようにリラックスできる環境が大切。
- ・ トイトレにつまづいた時には、工程ごとに考えるとよい。①自己身体への気付き(自分の身体に触れる) ②注意の切り替え・我慢 ③個室に入る(安心安全) ④着衣をずらす ⑤便器に座る ⑥トイレットペーパーを取る(体・手首をひねる動き) ⑦着衣を戻す(見えない部分)

トイレに行くということを具体的に子ども目線で考えることで、様々なことが日々の生活の中で関わってくるのだと学んだ。ある程度の気持ちの抑制だったり、自己決定だったりができる年齢や発達段階になっていることがスムーズにトイトレが進むのだと思った。

○保育へどう活かしていくか

- ・ トイトレを進めるには体の発達機能を待つのももちろんだが、その子がどこにつまづいているのか、そのためには日々の生活の中で何ができるのかを考えていきたい。毎日決まった時間にトイレに座ることは継続し、自分の身体への気づきが未発達な子には、自分の身体に触れる手あそび、着衣を自分でずらすことが難しい子には風船などを使った遊びやズボンにシールを貼って取る遊びなど「自分の身体を知る」というところから始めてみたいと思った。
- ・ 保育の中でまずはトイトレを進めて大丈夫か、その子の発達段階を見極めたうえでサポートしていきたいと思った。また、気持ちの切り替えや我慢の経験、ルールなどの社会性を生活の中で積んでいくことでトイトレにもつながっていくことを知り、意識して見ていきたいと思った。

○学んだこと・新たに知ったこと

- ・ 生活習慣は子ども自身でその必要性を感じて判断してするようになることである。大人に言われてやるものではない。
- ・ 一言で「生活習慣」といってもその捉え方で関わり方が全く異なるということを学んだ。決まった時間に決まったことをする（着替えや食事、排泄について）ことを身につけるのではなく、自分の状態を自分で判断し、行動することで心地良さを感じられるようになることが大切。そのために一人ひとりに応じた関りが必要だと思った。
- ・ 気質と環境の「適合の良さ」が発達の鍵になる。そばにいる大人の関りで変わっていく。生活の中で保育者側がやらせたい思いもあるが、その子の思いも大切にしながら行動に結びつけていく。
- ・ 泣いている＝抱っこではなく、泣いている理由を的確に洞察して満たすことでアタッチメントが育つ。安心を保障、ケアすることが大事である。アタッチメントは愛情やスキンシップではない。
- ・ 他者の身体に触れる時には、正面から相手の承諾を得てから関わるのは人としてのマナーである。常に園で安心感を持って生活できるよう配慮することが大事である。

○保育へどう活かしていくか

- ・ 子どもが泣いている時に、まず抱っこして安心できるように関わるのが多くあったが、理由に対して的確に対応する視点をより強く意識して保育していきたい。
- ・ 着替えや排泄のときなど、保育者側の都合になっていないか、自分の保育を振り返り一人ひとりの状態を把握し、その子に合わせた対応をしていきたい。やりたがらないときには「なぜなのだろう」と常に考える視点を持って保育に臨もうと思う。
- ・ 生活習慣を身につけるということは、決まった時間に決まったことをできるようにさせることではなく、その子自身がその必要性を感じ自分で判断してするようになることなので、ここを保育者みんなが共通認識し細やかな配慮や言葉がけなど丁寧に考えていきたい。
- ・ 子どもが泣いていたり何かを嫌がったりしたときに、慣れあいで受け流すのではなく、理由をよく考え適切な対応で、心や身体を満たすようにしたい。

○学んだこと・新たに知ったこと

- ・ あそびは保育者の発想力しだい。あそびの強制はしないが興味を持ちそうなアイデアを出し、提案したり呼びかけたりするとは積極的に行ってよい。
- ・ 主体的な遊びが生まれるには、豊かな環境（十分な量や適切な設備）が必要。保育者の活動のねらいは環境で用意する。どうあそぶかは子どもが自分で考える。
- ・ あそびは保育者の発想力次第であり、アイデアを子ども任せにするのは放任保育である。なんでもありではなく、「ここはこれをする」という見通しは示してあげたり、テーマを決めることは必要である。結果を早く出そうとしても出ない。過程が大切である。
- ・ 時間の目安・見通しを示すのは保育者の役割である。つなぎの時間の工夫は必要。
- ・ 物を独占したり自分の思いばかり通そうとしたりすると、みんなが遊んでくれなくなる。それはおもしろくないので、人の意見も聞き入れるようになる。つまり「わがまま」にはならない。

○保育へどう活かしていくか

- ・ 『子どもたちが主体的にあそべる条件とは「豊かな環境を整えること」保育者の願いが環境として用意されており、保育者は子ども同士の関わり合いを上手に応援していく存在であるべき』これを常に意識したい。
- ・ 子どもをよく観察し、何に興味を持っているかを見極めることから環境設定は始まるので、より注力したい。
- ・ 改めて環境作りの大切さを学ぶことができた。興味を引きそうなアイデアをはじめは保育者から出し、そこから子どもがどうあそんだり考えていくかを見守り観察する大切さを知った。これからエピソード記録を書くときにも、この意識を持って書いていきたいと思った。

★ほいく is

「離乳食完了期ごろまでの食べることの発達」

講師；定金 雅子

○学んだこと・新たに知ったこと

- ・ 食べる力とは、安全に食べること(機能的な発達)と楽しく食べること(社会的な発達)の両輪である。
- ・ 嚥下の 5 期モデルのうち、認知期(一番初めの先行期)に自分の口の中に何がどのくらいの量が入ってくるのかを確認できることが大切。将来自分の心地よい食事を選べるようになる力に繋がる。
- ・ 離乳食を通じて様々なことを学習している。そのため、ハイペースでどんどん与えない。前期はポタージュの硬さの物、中期は豆腐くらいの硬さ、後期はバナナの硬さの物を与えるとよい。完了期=大人と同じものが食べられるわけではない。

○保育へどう活かしていくか

- ・ 赤ちゃんが主体的に食べられるように食べることに興味関心が芽生えていることが大切。嫌がるときは無理強いせず、姿勢や一口の量などにも気をつけていく。
- ・ 離乳食に必要な体の発達は、遊びの中で引き出すこともできるので、適切な遊びを通して発達を促したい。
- ・ 手づかみ食べを多く経験した乳児ほど正しいスプーンの持ち方を獲得しやすいようなので、早くから食具を促すのではなく、手づかみ食べの時期も大切にしたい。